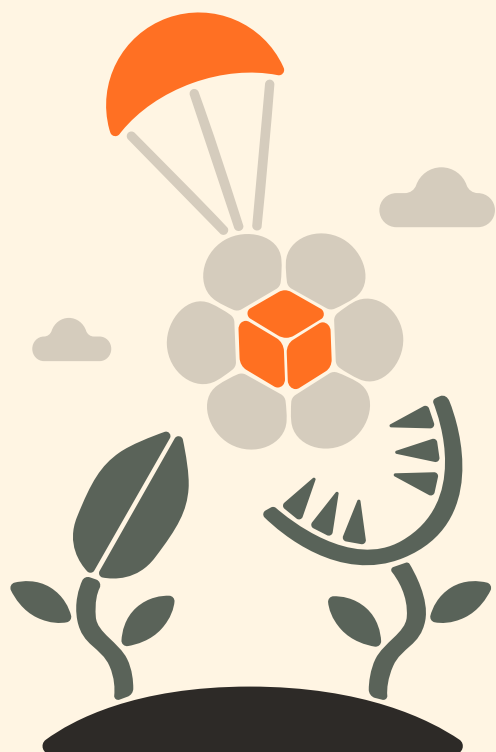




市場の変動を乗り切る 5つの方法

**効率的なデータ管理が、不確実な時代における
予測可能な運用を可能にします。**

市場の変動は一過性の課題ではなく、ビジネスを取り巻く環境として定着しています。IT リーダーは、予期せず変動する予算、契約途中で条件を変更するベンダー、データ基盤が整備されていないことで停滞する AI イニシアチブなど、複雑な課題に直面しています。このような状況のなかで成果を上げている組織は、変化への迅速な対応にとどまらず、データ管理の効率化を戦略的に進めています。その結果、効率性は現在あらゆる CIO が必要とする「予測可能性」をもたらしています。本資料では、成果を上げている組織がどのようにデータ管理の効率化を実現しているかを解説します。

効率的なデータ管理が、不確実な時代に予測可能性をもたらす

現在の環境で優位性を確立している組織は、投資額の大きさや意思決定の速さだけで成功しているわけではありません。共通しているのは、データ管理における効率性を重視し、それを運用の中核に据えている点です。

環境は確実に変化しています。コストは従来のように予測どおりには推移せず、ライセンス体系や料金設定は予告なく変更され、クラウドや仮想化にかかるコストも上昇を続けています。AI イニシアチブが停滞しているのは、モデルの準備不足が原因ではなく、データ管理基盤の整備が追いついていないためです。さらに、このような変化のなかでも、従来からの課題は依然として残っています。

限界は顕在化しつつあります。プロジェクトは遅延し、イノベーションは停滞しています。かつて変革を推進していたチームも、今ではビジネスを前進させるより、現状維持に多くの時間を費やしています。これは、計画や予算の問題ではなく、データ管理の構造の問題です。多くの IT 環境は「安定した世界」を前提に構築されています。しかし今、その前提が崩れています。状況が変化するたびに、追加コストや手戻りが発生し、予測可能性は低下していきます。

多くの組織がこの悪循環から抜け出せずにいる一方で、このような状況にあっても成果を上げている組織があります。それらの組織は、単に変化への対応が迅速なだけでなく、データ管理へのアプローチを根本から見直し、効率性と予測可能性を運用モデルに直接組み込んでいます。

効率性は基本的要件、予測可能性は結果

変動そのものがビジネスを停滞させるわけではありません。ビジネスを減速させる要因は、変動により発生する意思決定の遅延、ワークロードの停滞、予測できないコスト、繰り返される手戻りなどにあります。効率性は、そのような悪循環を断ち切るためのカギです。単なるコスト削減策ではなく、データ管理を設計するうえでの基本的要件となります。

効率性がデータ管理に組み込まれると、システムは、ビジネスに影響を及ぼすことなく変化を吸収します。コストは、リソースを全体として活用することで予測可能になります。ワークロードはデータ配置の制約に縛られず、最適な場所で実行できます。データは可視化され、常にアクセス可能な状態に保たれるため、必要なときに重要な情報が見えなくなることはありません。

また、プロジェクトが停滞することはなく、作業が山積みになることもありません。システムが変化に対応するため、変化のたびに IT 部門が煩雑な作業を繰り返す必要もありません。その結果得られるのは単なる効率化ではなく、変動にも動じない予測可能な運用基盤です。

変動はもはや一時的な混乱ではありません。変動を危機として捉えるのではなく、常に起こりうる状況として先手の対策を講じることで、効率性が得られます。

成功するための戦略

変動の激しい環境で成功するには、迅速な対応だけでは不十分です。データ管理そのものを変革し、一貫性のあるシステムのもとで効率性と予測可能性を確立し、安定した運用を実現することが重要です。この変革を可能にする重要な 5 つのポイントを以下に示します。

1 効率性をシステムの標準仕様にする

現在、多くの組織は必要に応じて環境をスケールさせることができない状況にあります。価格は変動し、供給は制限され、承認プロセスは 1 年前よりも厳しくなっています。新しいインフラの導入自体が選択肢に入っていないケースもあります。

その結果、問われているのは「容量をいかに拡張するか」ではなく、「既存のリソースをいかに最大活用するか」という点です。しかし多くの環境は、その前提で設計されていません。容量は断片化し、稼働率にはばらつきがあり、ワークロードを柔軟に移動して稼働率を高めることも困難です。多くの場合に、環境内に余剰容量が存在していても、データ管理のサイロ化によって運用上の制約のなかに閉じ込められているのが実情です。

インフラが不足しているのではなく、インフラを統合システムとして扱うデータ管理モデルの欠如が本質的な問題です。

成功している組織は、この課題を根本から解決しています。データとインフラを単一のシステムとして扱う制御レイヤーを導入し、手動による調整に依存することなく、リソースの利用方法、ワークロードの配置、ポリシーの適用を一元的に制御しています。

その結果、稼働率は向上し、無駄は削減され、コストの増大を伴わずに成長を継続できるようになります。さらに重要なのは、環境全体が予測可能になることです。サイロ化を解消し、リソース全体をシステムとして一元的に管理することで、必要なときに確実に利用できるようになります。

効率性はこのモデルにおける目標ではありません。環境全体の予測可能性を支えるシステムの基本的要件です。

2 クラウド・コストの制御を取り戻す

クラウドのコスト増大の背景には、クラウド環境におけるデータ管理が他の環境とは異なる方法で行われてきたという要因があります。一貫性の欠如は、時間とともに複雑さを増幅させます。サービスを提供するためにデータのコピーが繰り返され、ワークロードはそのデータ配置に依存するようになります。依存関係も積み重なり、環境の変更や移行がますます困難になります。

結果として、ワークロードの移動そのものが現実的な選択肢ではなくなります。その代償はコスト面だけでなく運用面にも及びます。この時点で、クラウドのコストは予測不能になります。価格が変更されたからではなく、価格の変化に対応する能力を組織が失ってしまうことが原因です。

コスト管理の主導権を取り戻している組織に共通しているのは、管理の一貫性の欠如を解消している点です。クラウドとオンプレミス環境で一貫したデータ管理を行い、データの配置場所にワークロードがロックインされることを回避しています。その結果、システムを再構築することなく、ニーズに応じて最適な場所にワークロードを配置・移動できる柔軟な選択肢を確保しています。

ここでの効率性とは、ワークロード配置の主導権を維持することです。配置を制御できることで、クラウドのコストは予測不能なサプライズではなく、予測可能な要素へと変わります。

3 複雑さを伴わずにモダン・アプリケーションを加速させる

モダン・アプリケーションは、本来、業務効率の向上に役立つはずでした。しかし、多くの環境では、従来の運用モデルを置き換えるのではなく、新たな運用モデルが追加導入される結果となっています。従来型アプリケーションは一連のプロセスで運用され、モダン・アプリケーションは別のプロセスで運用されています。それぞれに異なるツール、ワークフロー、データ管理のアプローチが必要となります。

この分断はすぐに顕在化します。IT 部門は、本来の重要な業務よりも環境の調整に多くの時間を費やし、新しいアプリケーションが増えるたびに管理対象も増加し、運用が複雑化します。アプリケーション自体に問題があるわけではなく、アプリケーション間でデータ管理の一貫性が欠如していることが、新たな導入のたびに予測可能性を低下させる根本的な問題です。

この問題を回避している組織は、従来型アプリケーションとモダン・アプリケーションの両方をサポートできるよう、データ管理の方法を標準化しています。両方を共通のシステムで運用し、データ管理、保護、運用に対して一貫したアプローチを採用しています。新しいアプリケーションを導入しても、運用やデータ管理の仕組みを変更する必要がなく、既存の標準プロセスのまま運用できます。効率性は持続可能なスピードとして、予測可能性は導入時の課題が発生しない安定性として現れます。

4 ベンダーのルール変更によるロックインを回避する

Broadcom による VMware の買収は、多くの企業にとって大きな警鐘となりました。ある日突然、ライセンス費用は急騰し、更新条件も変更されました。vSphere を基盤にインフラを構築していた組織は交渉力を失い、ほとんど選択肢のない状況に陥りました。技術的な選択を誤ったわけではなく、問題は特定のプラットフォームに依存するデータ管理モデルにありました。

この状況は VMware に限ったものではありません。ベンダーがルールを変更した場合に、自社の環境が対応できなくなるケースは珍しくありません。例えば、ストレージ・プラットフォームが特定のハイパーバイザに依存している場合や、データ管理層が単一のスタックと強く結びついている場合、あるいは何かを移行するだけで環境全体の再設計が必要となる場合などです。問題はルール変更の内容を理解することではなく、自社の環境が変化に耐えられる構造を備えていなかったことにあります。

VMware の状況を乗り越えた組織に共通しているのは、単一のハイパーバイザに依存しない一貫性のある基盤の上に構築されたデータ管理プラットフォームを構築していた点です。このような組織にとって、Kubernetes、Hyper-V、オープンソースの代替ソリューションへの移行は、机上の空論ではなく現実的な選択肢でした。ゼロからの再構築を行ったのではなく、主体的に選択を行ったのです。

選択の柔軟性を念頭に構築されたプラットフォームは予測可能性をもたらします。ベンダーのルールが後から変更されても、手元には既に次の選択肢が用意されています。意思決定を長期化させる大規模な移行プロジェクトが障壁になることはありません。効率性とは、特定の製品群に縛られず、柔軟なプラットフォーム上で運用することによって実現されます。

5 データを「使えるもの」に変える

ほとんどの組織は、必要なデータを既に保有しています。問題はその管理方法にあります。データが複数のシステムに分散していることで、発見しづらく、信頼性も低く、活用が困難な状態になっています。アプリケーションがそれぞれ独立して運用されていた時代には、このような構造でも機能していました。しかし、システムを横断してビジネスを連携させる必要がある現在では通用しなくなっています。

データは見つけにくくなり、意味を理解しづらくなり、意思決定への活用がさらに困難になります。その結果、データを活用する前に、検索や準備に多くの時間を費やしてしまいます。さらに AI の普及により、この問題は無視できないものとなりました。なぜなら、AI は単一システム内のデータだけでなく、組織全体にわたるデータへのアクセスとコンテキストの把握に依存するからです。データ管理が統合されていなければ、AI 活用による価値創出は困難です。

成果を上げている組織は、データ管理のあり方を見直しています。データを組織全体で共有・管理された資産として捉え、継続的な統合と整理を担う一貫したレイヤーを通じて一元管理しています。その結果、データの所在や意味が明確になり、必要なときに迅速にアクセスできるようになります。データの探索や修正に時間を費やすことなく、分析や意思決定など、価値創出のための業務に集中できます。

本質的な課題はストレージではなくデータ管理にあります。組織が保有しているデータを活用できるかどうかは、データ管理のあり方によって決まります。管理レイヤーを整備することで、データは必要なときにすぐに活用できる資産となります。

効率性がもたらすもの

不確実性がなくなることはありません。前進し続ける組織は、変化を制御するのではなく、変化に適応できる基盤を構築しています。データ管理の仕組みに効率性が組み込まれているため、環境が変化してもシステムが破綻することはありません。めざすべきは、混乱を完全になくすことではなく、環境のあらゆる変化のなかでも維持できる予測可能な基盤の構築です。

イノベーションは進み続けます。リソースをシステムごとに分散させて管理するのではなく、一元的に管理することで、コストを適切な水準に維持できます。また、データをサイロ間で重複させるのではなく、一貫したガバナンスのもとで管理することで、必要なときにすぐにデータを利用できるようになります。

業務も滞ることなく進行します。作業が停滞することも、山積みになることもありません。環境が変化するたびに同じ課題を繰り返し、立ち往生することはありません。効率的なデータ管理がもたらすのは、コストの削減や性能の向上ではありません。変化に左右されない信頼性の高いシステムです。すなわち、予測可能性の確保であり、これこそが、真の優位性を生み出します。

Everpure を選ぶ理由

Everpure は、変動性の高い環境を前提とした運用モデルを実現すべく設計されています。データ管理を変革することにより、環境全体が個別のルールで管理される独立したプラットフォームの集合体ではなく、単一のシステムとして稼働します。データは一貫したレイヤーで統合され、配置・保護・活用は単一の制御レイヤーによって管理されます。

Everpure は、環境に変化が生じてインフラの再構築を必要としません。ワークロードは特定の環境に縛られることなく、最適な場所で実行できます。クラウドとオンプレミスを単一のシステムとして統合し、モダン・アプリケーションと従来型アプリケーションを同一のデータ管理モデルで運用します。ポリシーは一度設定するだけで、あらゆる環境に適用されます。効率性は一時的なものではなく、構造として組み込まれます。リソース全体を一元管理して活用し、再設計なしでワークロードを移行できます。データの重複を排除し、可視性と可用性を維持します。

Everpure がもたらす成果は、変化を抑制することではなく、変化する状況下でも予測可能性を維持するシステムです。これにより、外部の環境に翻弄されずに継続的に前進するビジネスを可能にします。

Everpure のプラットフォームについて詳しく見る

ピュア・ストレージ・ジャパン株式会社
お問い合わせ：03-6690-0800（代表）

<https://www.everpuredata.com/jp/contact.html>